アメリカン・バイカーズ・ストーリー 38

HardRide LongWay

LÖYSÄLAISEN LAULU
2 WHEELED SPELL

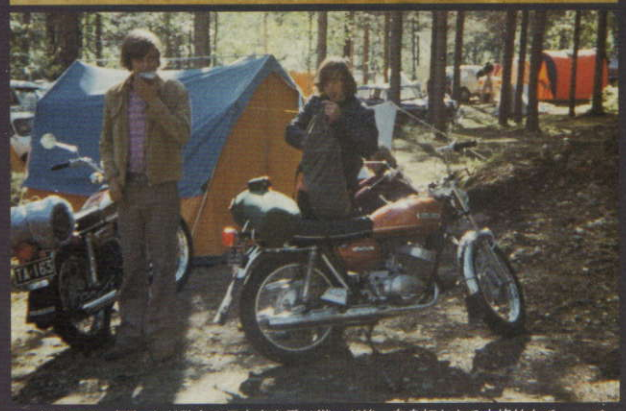
——流離者の讃歌、クロスロードの魔法（前編）——

Photo & Report : Koichiro Suga

JUHA KOKKONEN

ユーハ・コッコネン。55歳。フィンランド出身・ドイツ在住。年式不明ショベル・チョッパー所有。H-Dクラブ・フィンランドの前プレジデントであり、現SMOTO及びMMAFのメンバー。北欧バイカー界のゴッドファーザー的存在。www.finnbikers.fi
※SMOTO = フィンランド・モーターサイクリスト人権協会。MMAF（modified motorcycle association of Finland）＝フィンランド・カスタム・モーターサイクル協会。

古い写真の中で姉と弟に挟まれた幼いユーハ。まさにGood Kid Gone Bad？



スズキ2スト（下）など数台の日本車を乗り継いだ後、自身初となる本格的なチョッパーとしてカスタムに取り組んだ61年式マチレスG80（上）ですべてが大きく動き出した。

思春期の夢が全部消し飛んだ。「今すぐバイクが欲しい」まさに魂を売り渡しちまった。

初めに異常な興奮。

そして怖れが交互に襲ってきた。

薄紫の煙の中、ブレながら遥か後ろに置き去りになって行く世界……。

握りしめたスロットルから伝わる2ストエンジン独特の波動が、いつも……。

生き急いできた少年の魂と共鳴し、全細胞をシェイクする。

それまでには経験したことのない高周波の振動と金属音の中、我に返り慌ててギヤを2速に放り込んだ。

再びレッドゾーン目がけ軽々と振り切って行くタコメーター。3速、そして4速……、

「いける……乗れるぞ!!」

確信した刹那――快感は沸点に達して彼を支配する。

殉教者の法悦にも似た、天国を丸ごと手に入れたような勝利の感覚！

15歳のユーハがBIKER'S HIGH＝生まれてからずっと探し続けてきた存在の正体を知った偉大な――悟り――の瞬間だった。

「全部消し飛んだよ。パイロットになりたいって夢や、思春期にありがちなその他もろもろ……。確かなのはひとつ、今すぐバイクが欲しい!! だけさ。まさに『魂を売り渡しちまった』んだね」

唯一にして無比!!

まさに人生を決定づけたあの時を回想するユーハ・コッコネンの眼差しは感慨深げで、だが、どこか少年のような笑みを湛える。

SMOTO・MMAF（※）――フィンランドで最もクリエイティブなバイカー組織のメンバーで現在は南ドイツ在住。ヨーロッパを中心に世界を飛びまわる電子工学技師。H-DCF（ハーレーダビッドソン・クラブ・フィンランド）主宰のスーパーラリー2000の大成功も、当時プレジデントだった彼の尽力に負うところ大だ。40年間という長い歳月、H-Dのみならず多くのものを乗り継いで初めて知ったモーターサイクリングの本質と、バイクシーンへの洞察をフィードバックし、フィンランドのシーンを引っ張ってきた「文化系バイカー」。その一言一言に俺は何度もかけ値なしの、敬意と共感の相槌を打った。

JAWA350など数台のバイクを所有する父親の存在と、自分にとってまだ見たこともない「天国」を覗かせてくれた2歳年長の友人のKAWASAKIと、そしてユーハが少年期を過ごした60年代、バイクを駆ることは単にホビーの選択肢のひとつではなく、

「愚かで年老いた世界にNO!」

と意思表示する強力な手段としての意味を持ち始めていたのだ。

さまざまな反戦デモ、ロックフェスティバルや暴動……。極東の島国では共産ゲリラが人質を盾に飛行機やリゾートの山荘を乗っ取ったりしていた頃、冷戦とフラワー・レボリューションの嵐の中のフィンランド。

首都ヘルシンキでは過激なヒッピーやロカビリアン、さらにはストリートギャングの一部がモッズやロッカーズ……イギリス発のムーブメントと呼応したバイク乗りと合流してMCを結成。

ミーティングなど初期のバイクシーンが形成され始め、やがてアツという間に国中へと飛び火していく。

そういう時代の空気の中、トライアンフやBSA……平穏な田舎町を突然の嵐のように駆け抜けるロッカーたちを待ちわびるユーハ少年が若きバイクフリークになるのは、単に時間の問題だった。

「そわそわしてたね。いつも次のアクションに飢えてて。当時は手当たり次第、何にでも興味を持ち熱くなった……でも、バイクは別格だったんだ」

ほんの幼い頃から探してたのはいつも、

「ここじゃないどこか。現在でない未来と、待っている何か」

白夜の夏も氷点下の冬も、バイトで手に入れたモペッドで闇雲に走りまわり、同じ境遇の少年たちとCLUB HOUSE＝森の中のアジトに女の子たちを誘い込んではパーティー三昧という日々。年中恋に落ちたが続くことはなかった。そして二輪免許と、「マシン」と呼ぶに足る初めてのバイク＝JAWA250をGETすると学校をさっそくドロップアウト。

そして、

「次だ！ もっと速くて、でっかくて……本物が欲しい！ 今、すぐに!!」

ただひとつの確かな想いのためにがむしゃらに働いた。

「わかんなかったんだね。乗ることの深い意味とか……、とにかく待てなかった」

若さ、と目嘲する目まぐるしいバイク遍歴。HONDA、YAMAHA、SUZUKI、タイタンにGT550、KTM……理解しあうことなく通り過ぎてきた愛機たち。だが、ただ一台'61年式MATCHLESS G80……500ccのブリティッシュ・シングルチョッパーは17歳のユーハがたったひとりで組み上げた若き情熱の結晶だ。メカの知識やまともな工具やガレージはおろか、パーツすら満足に手に入らない71年当時、シーシーバーやアップスウィープパイプなどほとんどを自作。かつて憧憬の視線を送ったブーム全盛のCAFE RACERと肩を並べ、近隣都市ツルクのバイク・ムーブメントの一翼となる。シーンはまだ若く、モノも情報も乏しく、しかし絆はタイトで熱かった。年長のバイカーたちとマシン。遠巻きに噂する女の子たち……すべてが新鮮で刺激的。BIG BIKE' CYCLE WORLD…まわし読みするUS、UK、インポートのカスタム誌は穴の空くほど真剣に読み、広告ページのパーツは隅から隅までチェックした。

そして金が入ると即メールオーダー。大西洋を越えてやってくる宝物を何週間も待ち焦がれた。HELL'S ANGELS ON WHEELS、WILD ANGEL……だが、ユーハをもっとも深くインスパイアしたのは「バイクものはB級の定番」と揶揄するハリウッドの評論家連を沈黙させた金字塔……、

「EASY☆RIDERさ! リアルタイムで観たよ。スピードでもパワーでもない、まったく新しいバイク観。果てしなく続くハイウェイと長い流離。目に見える部分じゃなく、僕の心や魂のとても深くにあるものを……いや世界観そのものを変えてしまったんだ」

だが、多くのバイカーが不思議にもいまだに掴み損ねている「散弾銃に打ち砕かれるドル札でできた幻想の自由=ラストのメッセージ」に、やはり気づかぬままユーハの精神世界への長いバイク旅が始まる。

目的地は——完全な自由と完璧なCHOPPER——。まだ彼はハイウェイの終着点の、さらに遥か向こうで彼を待つ本当のゴールの意味を知らなかった。

発祥の地アメリカや、いち早く独自のスタイルを確立した隣国スウェーデンからの大きな波は、まだフィンランドに届き始めたばかりだった。H-Dはレア中のレア。米軍お下がりのULやWLはそれでも目撃すれば振り返って後ろ姿を見送る存在。KNUCKLEやPANに至っては登録台数が全国で10台以下。高価過ぎて誰も手が出す輸入業者もないありさま。そんな中、'69年地元ツルクに出現したARIEL SQUAE FOURのCHOPPPは衝撃以上の存在だった。忘れられないのは71年に目撃した2台のCB750——JAMMER CYCLEのカタログから抜け出したような記念すべき当時激レアの本格CHOPP第1号と2号は、しかし当局の取り締まりでアッという間に姿を消す。

シーンの黎明期。さまざまなカルチャーを生み出したヨーロッパですらCHOPPERを乗りまわすのには腹をくくる必要があった

そして すべてを賭けてCHOPPERに狂える時代だったのだ。

76年に入営した海軍で彼は諦めていた専門教育のチャンスと電子工学技師の資格を得た。3年余りの艦隊勤務、だがその間に起こった人生の一大事=結婚については、

「語るべきことは多くないねぇ」

それでも話してくれたのは、一男一女を儲け、息子にはCAPTAIN AMERICAより入れ込んだヒーロー=TTレースの世界チャンプ、故ヤモ・ザーリネンのファーストネームを与えたこと。古いYAMAHAがすれ違っていく心を癒してくれたこと。

「女性とバイク……大きな違いは生身のパートナーはカスタムできないってこと。何があっても丸ごと受け入れられなきゃ……」

フィンランドでも同じ。バイク乗り、そして自分自身であり続けることと人生のその他の事柄。そして最後には選択と決断の問題。それが良いも悪いも、判断は後まわしで良いんだ。うじうじとノスタルジーに浸っている場合じゃない。彼が選んだのは自分自身であり続けることと、そして振り出しに戻り、再び旅を始めること。

今度の目的地は、

「可能な限りの自由と完璧なCHOPPERだ」

「HERE I GO AGAIN ON MY OWN!!!」

ユーハを変えたあの風が、また吹き始めていた。

〈後編へ続く〉

女性とバイク……。生身はカスタムできない。何があっても受け入れなきゃ。

さすがフィンランド在住（当時）だけあって、北極圏がハーレーツーリングルートだった。

H-Dクラブ・フィンランド（欧州各国にあるHOGよりも古く濃い歴史を持つクラブで、スーパーラリーを持ちまわりで主催している）のメンバーとはカスタムやキャンプなどをしょっちゅう楽しんだ。

現在の愛車2台はチョッパーとセミチョッパー。

HardRide
LongWay